

第二次世界大戦中のイギリスにおける日本語教育¹⁾

敵性語として学ばれた日本語

田山 博子

はじめに

第二次世界大戦中の海外における日本語教育と言えば、日本の旧植民地や占領地における教育政策や日本語教育の実情が思い浮かぶ。戦後60年を迎えて特に関心が深まり、各分野にわたる研究成果も多く生み出されている。しかし、敵性語として学ばれた日本語に関する研究は多くはない²⁾。

本稿ではイギリスにおいて戦時中に行われていた日本語教育の実態を調査し、ロンドン（ここではロンドン大学SOASの前身であるロンドン日本語学校）で行われていた日本語教育がどのようなものであったか明らかにしたい。

当時、大英帝国として存在していたイギリス、そのイギリスを近代化の手本として追っていた日本、帝国主義的国民国家の権力と暴力の帰結ともいえる戦争、このような状況の中で、日本語教育はどのように行われていたのかを見る。

まず、大戦直前にどのような日本イメージが作られていたかを見てみよう。

第二次世界大戦直前、戦中に現れた日本のイメージ³⁾

イギリスにおける戦時中についての研究で、極東におけるその作戦やプランはかなり徹底的に分析されているが、対日本戦についての調査や

研究は少ないようである。イギリス国民の一般的な感情として「家族のものを極東へ出征させた人々以外は、日本という国がその意識に強く上らない」と言うことが、その理由とされてきた。(戦没者が日本との戦いで3万人であるのに対し、ドイツとの戦いでは23万5千人にのぼることからもうかがえるように、日本は目前のドイツほどにはイギリス人の意識に浮かびあがってこないというものであった⁴⁾。

英国の政治家や政策者の日本人に対するイメージはどうであったかと言うとC.Thorneが描くように「子供っぽい狂信者の典型でずる賢い猿のような人々」ということになり、ここには支配するものの生来の西洋優越と西洋の価値観、原則の普遍的正当さの意識が背景にあることを感じさせる⁵⁾。

1938年の日本の中国大陸侵略の時、外務大臣のAnthony Edenは「極東における白人の権威を効果的に主張することの重要性」を強調している⁶⁾。ここでも優位に立つ白人(イギリス人)がアジアという遅れた国に手をさしのべなければと言う「文明開化の使命」を主張しつつ自国がそこに留まることの権利を主張している様子が見える⁷⁾。1941年の太平洋戦争勃発後、長い間培われてきた偏見は最高潮に達する。政府の日本に対する見解は、情報省の政治的戦争記録によると次のようになる。「われわれのアジアの敵は、西洋の機械技術と、薄いベニア張りの西洋文化を手に入れた。しかし、その背後にあるのは今だ封建的な日本の精神なのである⁸⁾。」「日本の封建武士道の規範はヨーロッパ中世騎士道と一緒にしてはいけない・・・武士の刀が罪もない農民の首を切り落とす権利を有していたように、今、日本の兵隊は中国戦争において同じことをやっているのだ。」1900年代に人気を博した「武士道」は、1930年代には全く逆の評価を得るようになる⁹⁾。また、日本語にも言及している。「日本語は世界の中で構造的に最も曖昧な言語である。その拷問のような文構造は日本人の精神のねじまげられた姿そのものなのだ。」そして「勇気ではなく、神経的であることが日本の勇敢さの説明である。」とし、「所詮日本人は子供な

のだ。その行動が矛盾に充ち、混乱の極みと思われても、もし彼らを生子供だと考えれば納得が行く。その矛盾した行動は典型的な子供のパターンとみなすことができるからだ¹⁰⁾」と説明する。「武士のイメージ」がここでは「勇敢さ」から「残虐さ」へと正反対のイメージへと変化する。そして、日本を「子供」のイメージでとらえ「普遍化」することで自国の優位性を確認して行く様子うかがえる。

BBCでは作家や知識人が日本のことを酷評する。1943年の「奇形をつくる教育」という放送では「情けないほどねじ曲げられた性格は日本の教育の結果である」とし、「大日本帝国は、今まで人類が戦ってきた中で一番危険な敵である。」と結論している¹¹⁾。

しかしその一方では、「日本人とそのやっていることを一般的な憎しみだけで先導するのは馬鹿げている。日本人は多くの美点や徳を持っている¹²⁾。」と反論する人々もいた。公共の場においても憎しみを煽るような意見と、あまり感情的になるのをおしとどめようとする理性的な声も少なくはあったが聞かれた。しかし、一方向的に悪化していく日本のイメージを転換させる力にはならなかった。

一般の人々の日本に対するイメージはどうだったのだろうか。その手がかりとなるのは記録として残っている3つの方法で行われた意識調査である。

- 1、一般大衆意識調査 (Mass-Observation)
- 2、情報局諜報レポート (Ministry of Information Home Intelligence Report)
- 3、ブリティッシュインスティテュートによる民間人アンケート調査 (British Institute of Public Opinion Polls)

200人にわたるインタビュー調査では日本および日本人を「黄禍」としてとらえているものが圧倒的である。日本人が狂信的で自分たちとは違うと規定し、日本への非理性的な恐怖と嫌悪をあからさまにしている。

ドイツと比べても、日本に感ずる嫌悪感はずっと強く¹³⁾それは原爆が落とされた時点での調査にも「原爆を落とすことは正義であった」と述べた人が大多数であったことからもうかがうことができる。

英国にとって日本との戦いは、地理的に遠いと言うことが心理的な遠隔作用を生んでいたことは確かである。また、一般の人々がもっと新しい事実に即したニュースを求めていたにもかかわらず情報省は次々と新しいニュースを出すことができなかった。しかし、日本に対する憎しみが、アメリカやオーストラリアがそうであった程には深く広がりをもったものではなかったにせよ、やはりイギリス人の心の奥に残っていったのは事実である。

1944年7月までには、情報省は「日本に対する敵愾心はドイツに対するものと匹敵するほどになった」ことに満足の意を表している。しかし、日本軍による虐殺のニュースが怒りや恐怖を煽っている時にもかなりの人はそれらのニュースを「関係者の不安や不幸を増すだけのあまり賢くないやりかた」といった見方や「このようなニュースで暴きたてることが、日本に対する憎しみを煽り、アメリカを支持するために作られたのだ」と推測、また、はっきり表明しているわけではないが、「単なるプロパガンダだ」¹⁴⁾という意見もあった。「かつては中国を侮って、<残酷な猿>と呼んでいたではないか。そして今度は日本というわけか。」という労働党議員の議会での発言もあった¹⁵⁾。

実際に反日感情を煽るようなことはできたのだろうか。1943年の6月からインド総司令官は、「対日本戦」の重要性を認識させるため、前線でのプロパガンダをもっと活発にして低下した士気を上げるように主張している。しかし情報相B. Brackenはそのときも「それでも日本は何千マイルも遠い敵だが、ドイツはこの3年間たった20マイル先の海岸線に存在し続けているのだ」とかわしている。情報省の対日戦のプロパガンダの努力¹⁶⁾は第二次世界大戦のために作られた1887本のフィルムの中で日

本戦を扱ったものがたった14本であることからその消極的な態度がうかがえよう。

今まで一般に思われてきたイギリスの日本に対する全くの関心のなさという考え方は少々、修正を要する。東アジアは二の次の問題といわれてきたが、イギリスの一般の意見は対日本戦をたいしたものではないとして念頭から振払ったわけではなかった。日本に対する興味も憎しみもあったのであり戦争中はそれがはっきり出ている。為政者にも一般の人々にも未熟な人種偏見やステレオタイプの考え方があったのである。

戦争がプロパガンダによって敵を作り出して行く様はサム・キーン著の『敵の顔』や、ジョン・ダワー著の『人種偏見』で見事に描かれている。確かに戦争という極限状態では心理的かつ妄想的にひとつの方向に共同体が走って行き、その一方向性に加担するようにメディアや人々の意見が「敵」を作り出す。相手国を「他者」化することで、それに対する憎しみ、戦闘意欲、そして愛国心を確かめあうのである。どの国でもおこるこのメカニズムを否定することは難しい。ここでとらえたかった戦争における「敵のイメージ」が作られて行く様子は、どの国でも同様であったろう。しかし、イギリスではそんな中にも反対意見があり、結局はバランスを保つ場と空気があった。日本には残念なことにそのようなことは見られなかった。このことを記憶に留めつつ次章では、日本語教育について考えたい。

戦前までのイギリス人を中心とした日本語と日本研究

日本とイギリスの関係が外交的に確立されるのは明治維新からである。日本語も、明治維新前後に日本に來た外国人の著書や研究によって創り出されていく。

1825年にパリで、200年も前に編まれたロドリゲス (Rodriguez, キリシ

タン宣教師で日本に30年以上滞在し日本語の辞典をポルトガル語であらわした)の『日本小文典』が翻訳されたことによりヨーロッパにおける日本学は本格的に開始することになる¹⁷⁾。パリにアジア協会が創立され、そのころ刊行された『アジア言語史』には日本語の系統が論じられている。オランダ人による日本語文典、長崎出島の商館長として活躍したクルチウス(D. Curtius)の『日本文法私論』、ホフマン(J.J. Hoffmann)の『日本文典』は、その後、イギリス人、アメリカ人が日本語の研究に携わる際の大きな手助けとなった。

イギリス人の日本語研究は、そのころ清国にイギリス本国から派遣された植民地政治家でもあった大使らの中国語熱によって、また、中国研究に協力的な活動を続けたロンドン伝道会の言語研究によって促進された。宣教師は中国に来て日本の情報をいろいろと入手した。日本書籍もオランダ人が日本からオランダへ帰る際に途中下車した広東やマカオで手にいれることも可能であったようである。中でもメダースト(W.H. Medhurst)の『英和和英語彙集』が1830年に刊行され、これがヨーロッパやロシアに持ち運ばれ日本語学者が参照することにもなり、また、日本においては、これが英語学習の基礎となっていくのである。

宣教師による日本語研究は16世紀のイエズス会による研究に続いて、この19世紀のロンドン伝道会による研究は(実際にこの伝道会の人々は日本に足を踏み入れることはできなかったのであるが)日本語で神の福音を伝達する「聖書」の翻訳をするアメリカからの宣教師たちの来日により、活動が拡大していくこととなった。

一方、外交官として来日したイギリス人の中で日本研究に貢献した人は多い。オールコック(R. Alcock)は『大君の都』の著書であるが、初代駐日大使であった約3年間の間に『初学者用日本文法綱要』と『仏・英語対訳、片仮名・ローマ字による日常日本語対話集』を著わしている¹⁸⁾。同じく外交官として来日した(E.M. Satow)サトウは『一外交官の見た

明治維新（岩波文庫、「A Diplomat in Japan, London: Seeley, Service & co., 1921」）の著者として知られているが、彼は、明治維新をはさんで25年間日本に滞在し『会話篇（Twenty-Five Exercises in The Yedo Colloquial for the Use of Students with Notes. Yokohama, 1873）』『英和口語辞典（An English-Japanese Dictionary of The Spoken Language. E.M.Satow and Ishibashi Masakata. London, Yokohama 1876）』を出版している。その他、彼は『日本耶穌会刊行書誌（The Jesuit Mission Press In Japan. 1591-1610[privately printed], London 1888）』等のキリシタン関係の書物を収集、研究を重ねた。これが、現在国語学での切支丹語学の基礎をつくることになった。また、日本仏教に関するの本も収集、神道関係は『祝詞』の翻訳もしている。彼は1890年の時点で母国イギリスでも日本語教育を考えていたらしいが、これはあくまでも話し言葉の教育であり、書き言葉はその書体の複雑さから考えには入れていなかったようである¹⁹⁾。

アストン（W.G. Aston）は1864年にイギリスの日本公使館通訳生として来日するが、1869年には『日本口語小文典』（A Short Grammar of the Japanese Spoken Language, Nagasaki, printed and published by P.Walsh. 1869）を出版している。来日5年目にしてかなりの精度を持ち豊富な例があげられた体系的な日本語文法書が書かれる背景にはヨーロッパの日本語学、切支丹語学のそれまでの研究の蓄積があったからであろう。アストンは言語的な素養を持ち、実用性を重く見る宣教師の日本語研究と少し違い、日本語を様々な角度から捉えようとした。1876年には『土佐日記』1896年には『日本紀』の訳をしている。1871年に出版された“A Grammar of the Japanese Written Language”の序文では、日本語と琉球語が非常に密接な関係にあること朝鮮語と日本語の文法的な親族関係などにも言及している。これは、後に白鳥倉吉、岡倉由三郎などによる日朝両語比較論へと発展していく基となる。

1873年にチェンバレン (B.H. Chamberlain) が来日、まず日本海軍兵学寮の英語教師となり、1886年に帝国大学文科の日本語および博言学の教師となっている。代表的な日本研究は『日本口語便覧』“A Hand - Book of Colloquial Japanese. London, Tokyo, 1888”²⁰⁾であるが、1899年には“Practical Introduction to the Study of Written Japanese”を著わし、日本語には文語と口語の二種があり、口語は日常の会話として学習するが、文語を知らなければ書物、新聞、手紙の理解もできないとし、文語の学習の大切さを説いている。彼の蔵書は上田万年に譲られた。

1861年から1866年まで中極と日本で海軍医として滞在していたディキンズ (F.Dickins) は1882年から1901年にロンドン大学に登録しており、植物学、民俗学の書物を著わしている。1866年には百人一首の翻訳、1875年から1888年にかけては忠臣蔵や、酒呑童子、竹取物語、の翻訳を手がけている。彼の蔵書はブリストル大学に寄贈された。

ガビンズ (J.Gubbinns) は1890年にオックスフォード大学の日本語科の講師になるが学生がいなかったため1912年に60歳で退職した後は誰も後継者がいなかった。彼は日本の近代史の著作がある。1906年から1916年の間は数少ないが、シャンド (Shand) の編による“Japanese Self-Taught”が、そしてピゴット少将 (F.S.G. Pigott) による“The Element of Soshō”が出版されている。

イギリス人による日本語学は日本では次第に東京帝国大学を中心に「国語学」として発展して行くのだが、逆に英国ではあまり顧みられなくなっていく。しかし、特に明治初期に西洋人、特にイギリス人によって研究された日本語は世界の中の一つの言語として「認識」され、数ある言語の中のひとつとして「体系化」され、世界の中の一言語として「創出」されたのである。

ロンドン近郊のベッドフォード、暗号解読で有名になったブレッチェリー・パーク (Bletchery Parkの正面に、SOASでの日本語コースが始

まる前に日本語トレーニングが行なわれた建物がある。ケンブリッジ大学の中国学の教授であったロウエ (Michael Loewe)²¹⁾ は、1942年の二月に始まったこのコースの一期生であった。ここでは6ヶ月のコースが開始されたが、SOASで本格的に始められるコースの実験台のようなものであった。目的は電報などの文書読解であった。最初はローマ字で学んでいたが漢字も覚えさせられた。たった6ヶ月のコースにもかかわらず読売新聞や朝日新聞までも読まされたと言う。このコースの生徒はラテン語やギリシア語を勉強した語学に才能のある学生が選ばれてきていた。コースの総勢は25人から30人程で、テキストはアイゼモンガ (Isemonger) の著書、三省堂の辞書を使った。しかし、SOASで本格的に日本語コースが開かれるようになると、このコースはSOASやブレッチェリー・パークへ吸収されていく。

ロンドン日本語学校 (ロンドン大学SOAS) での集中コース²²⁾

1 日本語教育の目的

激しさを増していく前線からの要求に答えるために、戦時下の日本語教育はその目的を限定されていく。それは、できるだけ早く、効率よく学習を終え、戦場でいかに母国のためにその学習を役立てるかということであった。言語教育が「敵国の言葉を学び母国の為に役立てる」という目的に収斂する近代の語学学習の構図であるといえよう²³⁾。

SOASでこのコースがはじまったときのラルフ・ターナー学部長の話は以下のものであった。

「・・・ここでの学習は、18ヶ月間日本語を習った後、東南アジアの戦場で敵の通信を傍受し押収した書類を翻訳し、捕虜を訊問したりして、情報を取り、全軍の作戦に貢献するために行われる。イギリスの旧領土を奪い返し、その人民を解放しなければならない。当面の敵は頑強な

日本兵でも、ジャングルでもマラリアでもなく、日本語である。これを早くマスターし、本当に弾丸の飛び交う戦線で活躍できるようにしてほしい・・・」と言う挨拶でロンドン大学での特別日本語コースは始められるのである。1942年に始まったこのコースは1947年までに非常に短い期間の訓練生も入れて総計648名の日本語学習者を作り出した²⁴⁾。

2 コースの概略

授業は月曜から金曜まで、朝9時から12時、午後は2時から5時までで、このうち4時間は教師の指導の下で、あとの2時間は自習であった。放課後も予習、復習、宿題があり、また、毎週二回日本や極東に関連した題での講演が一時間ずつ行われ、日本語の背景となっている文化やインド、東南アジアの情勢についての知識が得られるようになっていた²⁵⁾。

SOASで行われた戦時中の日本語コースは大きく分けて主となるA,B,C,D,Eの5コースと、時に応じて行われた短期間のコースがある。次にあげるAコースが時期的に一番早く、それより3ヶ月遅れてB,C,Dの3コースが始まっている。そして、それまでの経験と反省を生かしてEコースがスタートするのが、1944年の6月である。

Aコース (State Scholarship (general purpose course) 1942.5~1943.12

政府給費生のためのコース、もともとは民間人のためのコースであったため、学生は学校休暇がもたらされた。選ばれた30名のうち28名が卒業。幾人かはこのコースの教官となる。

このコースでは読み、書き、話すという一般的なトレーニングの他に、適性に応じて翻訳、訊問の2グループに分け、後に軍隊用語も学ぶようになる。

このコースの卒業生の中には、社会学者ロナルド・ドーア (Ronald Dore)²⁶⁾ 日英の産業界に貢献した元国鉄総裁のサー・ピーター・パーカー (Sir Peter Parker)²⁷⁾、ケンブリッ

ジ大学の教授で荻生徂徠の研究家であるマックエバン (John McEvan)、日本語と能の研究家であるパトリック・オニール (Patrick O'Neill)²⁸⁾ 等がいる。

Bコース (Service Interrogators' course) 1942.7~1945.7

訊問官養成コース、学生は語学の単位をもっている者が軍の中から選び出された。

戦場の日本軍の俘虜および捕虜を取り調べ情報を集める訊問官を養成するため専ら会話の練習を行う。軍からの要求で、短期間に訊問が行える会話力をつけるために、日本文の読み書きはせずに、ローマ字を使い、聞く力をつけることが重点的に行われた。全期間を通じて、海軍からは13名、陸軍からは42名、空軍からは19名の計74名が選抜され、休暇もない特訓の13、16、20ヶ月を送ることになった。しかし全体の18%に近い13名は卒業できなかった。61名の卒業者はインパール、ビルマ戦線へと送られた。

このコースの卒業生の中には、「風は知らない」「スージー・ウオンの世界」などの小説で知られるリチャード・メイソン (Richard Mason)、浄瑠璃の研究家チャールズ・ダン (Charles Dunn) 駐日大使となった外交官のサー・ヒュー・コートッツイ (Sir Hugh Cortazzi)²⁹⁾ 等がいる。

Cコース (Services Translator's general course) 1942.9~1945.10

翻訳官養成コース、1942年7月の第一期から第六期1945年10月入学まで続く。期間は15ヶ月、海軍と陸軍より89名が参加 (空軍からはなし) 11名が落第し卒業生は78名。

このコースでは、読み、書きを重点的に口語文法から教えられた。話す練習はまったくなされなかったのである。

このコースに在籍したルイ・アレン (Louis Allen) はのちに

会田雄次著の『アーロン収容所』を英訳したことで知られている。また、日本中世文学の権威、ダグラス・ミルズ (Douglas Mills)³⁰⁾ やジョン・ラッセル (John Russell 哲学者バートランド・ラッセルの息子) もこのコースの卒業生である。

Dコース (Services Translators' Short Course) 1942.7~1943.9

翻訳官短期養成コース、このコースは6ヶ月ないし9ヶ月という短期間で鹵獲文書解読に必要な文語体や、軍隊用語を覚えさせられ、前線に送られた。1942年の7月に始まったが、1943年9月に訓練中の22名が音声・言語部に、転部しておわりとなる。主として空軍、一部は海軍陸軍から計65名が入学するが、前期の22名が転部したため、卒業生は32名、11名は卒業できず、原隊復帰になった。

Eコース (Service General Purpose course) 1944.6~1947.5

軍総合コース日本軍俘虜の訊問や鹵獲文書の解読が短期間に行えるようにと一年数カ月で話すこと、読むことができるよう訓練する最後のコースである。上記のB,C,Dコースで述べたように1942年にスタートした最初の2年間は聴き話すことと、読むことを別々に訓練するようというのが軍の要請であったが、1944年2月にアキャブ方面での英軍の反攻が始まって、読み、話しの両方できるものが必要となり、前線から国防省に催促があり、やっと1944年6月からこのコースが開始された。大学側も前からの主張してきたことが通り、やっと整備されてきた教材や経験から効率的な訓練が行われた。1945年8月には日本は降伏しているのだが、日本に派遣する進駐軍のため日本語の要員がさらに必要となり、最後に第2期生が卒業する1947年5月で終了となる。このコースには、

海、陸、空軍より92名が入学、14名は学業半ばで原隊復帰となり明確ではないが、少なくとも約70名が卒業したと思われる。この中には、元JAPAN SOCIETYの会長をつとめた歴史学者のL.A.ラドボーン（Rew Radbourne）³¹⁾や企業人として日本に住み、活躍しているテリー・タウンゼント（Terry Townsend）³²⁾などがある。

この主たる5コースの他に既に戦前に日本語を少し知っていた情報局や民間人などのための補習コース、海軍省や一部の外務省職員のための特別短期翻訳コース、音声・言語学コースもあった。

次にどのような教官が日本語教育に携わっていたか、見てみよう

3、教官と学生、³³⁾

日本語の主任講師は、駐日英国大使官付き武官として、1928年来日し、小樽高商、静岡高校で英語を教えたフランク・ダニエルズ、その夫人のおとめやロンドン在住の日本人などを含めて、全期間を通じて計39人のイギリス人、カナダ人2世が教育にあたった。ダニエルズが中心となって主にイギリス人が文法を教え、日本人やカナダ人二世は会話や音声教育、漢字は草書体の練習などにも力が入れられ、おとめ夫人が筆順の指導をしている。イギリス人の教官の中には、軍人であった人が多いが、この中で、ピゴット少将のことに触れたいと思う。彼の父F.T.ピゴットは1888年に明治憲法制定のための日本政府法律顧問として来日している。ピゴット一家はそれから3年間滞日するのだが、このピゴット父子の日本との「絆」は日英親善の大きな礎となる。父ピゴットは、ロンドンの日本協会の創立者であったし、息子F.S.G.ピゴットは一度断たれた日英の絆を復活させようと、戦後、日本協会を実現させている³⁴⁾。

1941年12月に起こった日本の真珠湾攻撃は彼に激しい驚きと悲しみを与えるが、自分が敵国の言語を読み、書き、話すことのできる数少ない

英国人であることを自覚し、SOASでの日本語の指導を申し出たのだった。戦争が終わると、彼の旧知の友、『バターン死の行進』の責任をとって裁判にかけられていた本間中将を救うため、又、重光葵への投獄の宣告を軽減しようとする限りの働きかけをしている。ピゴット少将のような心情の持ち主が教員の一人であったことによって、日本語コースで学ぶ人々は大きな影響を受けたに相違ない。

コースで学んだ学生は、軍関係者、それも軍入隊以前に学校でフランス語やドイツ語などの語学を学び優秀な成績を修めていたものや、IQの高い、グラマー・スクールの大学入学直前の学生や、既にギリシャ・ラテン語などの外国語でよい成績を修めている優秀な大学生であった。緊急に大量に要請するため、このように日本語要員が選ばれていたのである。

ほとんどの学生は、この急拵えの日本語教育を日本や日本語のことに興味すら持ってすらいらないという白紙の状態ではじめることとなった。しかし、中にはサー・ヒュー・コータツツイのように、契機となる経験を持ったものもいる³⁵⁾。

また、日本語を選んだのが本当に偶然であった場合もある。召集後、語学特別訓練の募集があった時、ロナルド・ドーアは4つの外国語（日本語、中国、トルコ語、ペルシャ語）の中から第一希望をトルコ語（19世紀の歴史を読んでおり、興味があったから）第二希望は中国語を選んだ。ところが、すでに野蛮な国と言うイメージがあった日本語を希望する人はひとりもいなかったため、彼の希望は通らず、日本語のコースへまわされてしまったと言う。しかし、電話のインタビューで、彼は「人生であれほど運の良い間違いはなかった」と感慨深げに述懐して言う。語学の才能のあった彼は、コースの助教にも選ばれている。

インタビューや質問票での返答で、日本語コースに入る前は、やはり新聞、ラジオのニュースなどから、日本に対してあまり良いイメージを

持っていなかったと答えた人が多い。しかし、実際に、訓練が始まってみると、週ごとのテストがあり、それに失敗すると原隊復帰というプレッシャーがあり、もともと語学には適性のある優秀な学生だったこともあって、それまでに学んだことのある語学とまったく体系の違う言語の習得にのめり込んでいった。

訓練は厳しかったがロンドンの音楽会や、劇場、ミュージカルなどを楽しむ機会もあった。(軍関係者には特典が設けられていた。)また、ピーター・パーカーはチームを組んでスポーツを楽しんだと述べている。クラスの雰囲気は知的好気心に満ちたアカデミックなものであり、みんな軍服を着てはいたが、(軍隊内のようなことはなく)お互いの言葉遣いや態度も丁寧で、明るいものだったようだ。

それでは、実際のコースがどんなものであったか、見てみよう。

4 コースの内容³⁶⁾

コースの始まったばかりの頃は、国防省の要請で、翻訳組と訊問組に分けられ、翻訳組には、読み方、書き方だけ、訊問組には話し方だけを教えることになっていたが、それではあまり効果のないことがわかり、1、入門期(入校より7週間)、2、基本習得期(第8週から35週まで)、3、軍隊用語習得期(第36週から40週まで)、4、翻訳、訊問の実務練習とその仕上げ期(第41週より卒業まで)の4期にわけられるようになった。内容を詳しくみてみよう。

1、第1週から第7週まで

急にむずかしものを教えることの無いように配慮され、軍隊生活で型にはまったものの見方から再び学生時代のような精神風土にもどすように考えられていた。日本語の勉強は非常に難しく厳しい勉強を通じて、日本語という新しい言語体系のシステムを理解していく、という知的好

気心を満足させるように考えられていた。C.ブラックーBlacker（前説²⁴）は講師として、このコースに加わっていたが、クラスの雰囲気は非常に知的で、一生懸命やらなければこの謎めいた言語を理解することはできない、という暗黙の了解のもとに、ひたすら教師も生徒も努力していた様子を語っている。テキストはマックガヴァンの『日本語話し言葉』を、また、吉武講師が蓄音機に吹き込んだ日本語のテキストを使用、使用語彙は基本単語に限られていた。日本語の構文が英語や他のヨーロッパの言葉と違うということをごとさら強調されることの無いように、しかし暗記のような単調な作業にも耐えねばならないよう教えこまれた。

- a.1時間、発音と文法（文の成り立ち）のポイントが卒業生によって教えられた。発音は音の高低と拍を学ぶための練習が主であった。また、重要な助詞と約200の語彙が導入された。
- b.1時間、資格のある英国人の講師から口語文法の概要を習う。テキストは早く流し、説明は必要に応じて広がりも持たせ、あまり重要でない部分は重要度の低いことがはっきり指摘された。テキストの内容に出て来る言葉を暗記する必要は無かったが、dについての質問は奨励された。
- c.1時間、日本人の有資格の教師から日本語による授業を受け、簡単な翻訳の練習をする。限られた数の語彙が新しく導入される。
- d.30分、若いカナダ生まれの2世のもとで蓄音機による発音練習をする。この指導は忍耐力があり、良い発音ができ、よく聞き分けられる耳を持った人なら、誰でも良いのだが、音声学の運用知識を持っていればなおのこと良い。

2、第8週から35週まで、毎日

- a.1時間、有資格の講師の下で、これは日本人でも英国人でも、このコ

ースの助教でも良く、口語の指導を受ける。テキストを何回も繰り返し、質問に答え、必要に応じて文法の説明をした。

b.1時間、書き方の訓練、書き順を示すために日本人の教師が同席するという条件のもとにコース出身の助教、あるいは有資格の日本人講師によってなされた。

c.2時間、30分ごとに四区分し、日本人の講師、助教と会話をする。または、個人で蓄音機での聞き取り練習をする。この30分ごとの会話練習は小グループかマン・ツー・マンの練習となり、毎日必ず最低30分は日本語で会話をするように義務付けられていた。T.タウンゼントはインタビューの際にこの会話訓練がとてもよかったと話している。ネイティブの日本人のそれぞれの個性が出て、30分ごとに先生が変わるので、話のバラエティーも豊富になり、楽しかったと感想を述べている。

3. 36週から40週まで、毎日

a.1時間、「ナリ・スタイル」(『・・・なり』は日本軍の公用語でよく使われる表現、助教のもとで。

b.1時間、口語体入門、英国人でも日本人でも有資格の講師のもとで、あるいは、コース出身者の下で習う。

c.2時間を四区分し、30分ごとに小グループで、あるいはマン・ツー・マンで会話を練習する³⁷⁾。

4.41週から卒業までの毎日は以下の要領で行われた。

a.1時間、有資格者の英国人、日本人、あるいはコース出身者の下での翻訳と実習。特に卒業までの二ヶ月間は前線から送られてくる鹵獲文書の速読、要訳を作る練習、部隊名の解読、草書についての訓練も行われた。しかし、適性があると認められた学生はこの段階よりも以前に草書の訓練が始められ、特に読むことに重点が置かれてい

た．草書は日本軍の手紙、日記、個人的なメモを読むために必要であった．ピゴット少将やおとめ・ダニエルズがこの訓練に当たった．R・ドーアはインタビューの中でおとめ・ダニエルズの草書を黒板に書いて見せてくれたその手つきまでよく覚えていると回想している。

b.1時間、有資格者の英国人、日本人、あるいはコース出身のもとで口語体の訓練を受ける．前線で訊問した経験のある講師から訊問のやり方の訓練を受ける。

c.2時間を四区分し、30分ごとに小グループで、あるいはマン・ツー・マンで会話をする³⁹。

以上がコースの概要である．この他にも使用されたテキストとしてはエリセーエフ／ライシャワー著の『大学生のための日本語入門』（Elisseeff/Reischaur: Elementary Japanese for University Students）や松川梅賢が難しい筆記体を読むために以前から使用していた『草書解読の参考』等も使われていた。

最後にこの教授法の特徴を挙げておこう。

初期の頃は訊問を目的とするため、聴き話すことだけに集中するクラスと、押収文書等の読解を目的とする翻訳だけの訓練をするクラスに分けていたが、前者は全く文章が読めず、後者は聴き話すことが全くできないという特殊なものであった。これは、短期間で目的だけに焦点を合わせたコース作りのせいであるが、言語教育から見ても効率の悪い学習法であり、戦場でもこの訓練法の不備はすぐ顕われた。

最初はローマ字で学習し、同じ内容をもう一度漢字仮名まじり文で読む方法がとられている．これは、二度手間であるが、漢字仮名を憶える初期のエネルギーを会話等すぐ役に立つ訓練に振り当てるためであると思われる．現在では、日本国内では、ローマ字から入る教授法

は殆どないが、海外（英語圏）ではまだ根強い人気があるようだ。

音声を重視する。その頃はテープが無かったので、レコード盤を使い（グラモフォン）、教師の模範発音だけでなく、学生の発音も録音し実際に聴かせて直すと言う贅沢な方法がとられていた。

繰り返しの練習が多く、その単調さに嫌気がさすときもあったが、結局それが後になって大いに役に立った。教授法としては、オーディオリンガルとGDM（Graded Direct method）を連想させる。

会話の訓練では二時間を30分ごとに区切り、それぞれを違った教師と日本語だけで話す。この授業はユニークで、学生からの評判も良かった。教師の個性、生徒の個性が生かされて、楽しいばかりでなく、さまざまな話し方、音声などに慣れる良い機会でもあった。

役立つ教科書等の教材は無かったが、教員がグループでクラスを受け持ち、教科書もそれぞれが手書きをする等様々な工夫が見られた。

語学教育として見ると、このコースが特にユニークであったとは思えない。また、インタビューの答えからも窺えるが、学んだ日本語が、コース終了後、戦場ですぐ役にたったかという点も必ずしもそうとは言えなかったようだ。しかし、このコースの出身者がその後も日本と大きく関わりを持ち、日英の親善回復に尽力するのである。理由はさまざまに想像できるのだが、大きな要因のひとつと考えられるのは、教員となった人たちのパーソナリティの影響である。コースの主導となる、研究熱心なダニエルズ、親日的な態度や言動が伝説にもなる程のピゴット少将は、日本語を敵性語という観点から教えたとは思えない。また、日本人

教員として加わる築田銓次は東京帝国大学出身で、読売新聞の記者をしていた。同じく松川梅賢は同盟通信社の記者であり、この二人は開戦前から日本に帰国せず英国に残ることを決心していたようである。メディアに關係していたこの二人がコースの主要教員となるわけだが、チャンスはあったのに何故帰国せず、戦争の相手国で母語を教えることになったのであろうか。日本の植民地であった台湾で生まれた黄影輝は東京帝国大学出身で宣教師としての教育をうけるためにケンブリッジ大学で3年間勉強した。台湾人でありながら、英国で日本語を教えることになった運命を彼はどのように感じていたのだろうか。カナダ軍派遣の二世の軍人たちは、カナダでの対日差別に反抗し英国に渡り、この訓練コースに加わったと言われる。今となっては、想像するだけであるが、このコースに関わった人々はマージナルな位置にいた人々であり、一国に限定されるような国民的所属を持たない人々であったということができよう。戦争という国家意識が剥き出しにされる場で、その戦争に狩り出されて行く学生たちを教育する人々が地理的にも精神的にも一国に執着することのないような人々であったということは興味深く思われる。

さいごに

私が初めて日本語を数あることばの体系のひとつとして意識したのは、日本語教育に携わるようになったロンドンである。すでに20年以上も前のことになったが、その時さまざまな場面でお会いした方々の流暢な日本語に興味をもったのがこの小論のそもそものきっかけであった。日本で引き続き日本語を教える立場となり、何年かぶりに、かつてロンドンでお目にかかった方々にお会いしたり、インタビューをさせていただいたのが5年前である。それから、何人かの方がお亡くなりになった。だんだんに記憶としての生の声を聞く機会が少なくなっていく。敵性語と

して学ばれた当時の日本語の教科書など、分析したかったがそれは次の機会にしたいと思っている。

最後に感謝をこめて付け加えておきたいことがある。私事ではあるが、ロンドンで日本語を初めてイギリス人に教えることになった時、使った教科書『新しい日本語 (Japanese for Today)』の著者の中のお一人は奇しくも山口幸二先生だったのである。

注

- 1) 本稿では「イギリス」と表記しているが、正式にはユナイテッド・キングダム (連合王国) である。アングロ=サクソン系のイングランドとケルト系のウェールズ、スコットランド、北アイルランドの四ヶ国の連合体をさしている。この連合体はイングランドが中心になって統合したものであり、イギリスと一括りにする中での国民意識はかなり複雑なものがある。ブリティッシュという認識はあってもイングリッシュに同化しているわけではない。
- 2) 筆者は修士論文で、第二次世界大戦中にロンドン日本語学校 (ロンドン大学) で行われていた日本語教育に焦点を当て、適性言語として教えられた日本語とコースに係わった人々、また、その教育がなされる背景としての日本イメージ、日本人像を探った。
- 3) この節は、英国のメディアにおける反応とAnthony Adamth-Waite, Professor of History and Head of Department, Loughborough University) の論文 ‘Brithish views of Japan, 1941~1945’により構成する。その出典は ‘The Gallup International Public Opinion Polls; Great Britain 1937~1975’ である。引用部分の日本語訳は本稿筆者による。
- 4) Angus Calder, ‘The People’s War’: Britain 1939~45 (London, 1969), p.488’
- 5) C.Thorne, “The Issue of War” (London, 1985)
- 6) B.A.Lee, op.cit., 94 より引用「南京虐殺の報道」の後である。
- 7) Stanly Olson (ed), “Harold Nicolson: Diaries and Letters 1930-1964 (Penguin 1984), entry for 19 December 1941,221”
- 8) ‘Public Record Office’ (hereajter PRQ), FO898/267, ‘Propaganda Plan for Japan’ (Political Warfare Excutive)「真珠湾攻撃」, 「プリンスオブウェール

ズ、レパルスの二戦艦が日本軍により撃沈された」後の報道である。

- 9) コンティヘルム著『イギリスと日本』より引用「・・日本の精神風土の根源に関する興味がいかに大きかったかは新渡戸稲造の“武士道”が広く読まれたことによっても明らかであろう。1902年に書かれたこの本は、1904年にははやくも第10版が出ているのである。社会主義者のシドニーとベアトリスのウエップ夫妻は伝統的な武士の価値観のなかにイギリスのかかえる病弊の療法を見いだしているほどである。」
- 10) FO 898/270, PWE 'General Background for Political Warfare against Japan, 25 March 1942'
- 11) 'The Listener', 10 June 1943
- 12) 同上、詩人であり批評家でもあり日本滞在の経験のあるSir William Eptonの発言5 March 1942
- 13) In May 1944 the Ministry of Information commissioned a British Institute of Public Opinion poll on attitude to Japan. One half of those questioned considered 'the Japanese either as dangerous, or more dangerous than the Germans'. Moreover, 'fewer people (42%) expect us ever to be friendly again with Japan than expect us ever to be friendly with Germany (65%)'. To the question 'What do you think is the biggest difference between the everyday life of the Japanese and everyday life in this country' 23% gave low wages, low standard of living; 11% said no personal freedom, feudal system; 11% replied fanaticism; 8% answered religion-'they have no God. In a separate 1943 poll asking which country people would most like to visit after the war only 1% said Japan with 6% favouring Germany and Austria.これはブリティッシュ・インスティテュートによる民間人アンケートからの引用である。ドイツと日本との比較が見られて興味深い。
- 14) INF 1/292 Second Quarterly Report of MOI Far Eastern War Committee, 17 Feb. 1944
- 15) Hansard, 395 H.C. Deb 55 (1943),
- 16) Frances Thorpe and Nicholas Pronay, "British Official film in the Second World War" (Clio, Oxford, 1989)
- 17) このフランス語訳の『日本小文典』はJ.P.A. RemusatとM.C.Landresseによって翻訳されたのであるが、このことはイギリス人もドイツ人もロシア人も日

- 本語に関心をもって小論を発表したり、語彙集を編集したりしていたようである。(杉本つとむ著『西洋人の日本語研究』)
- 18) オールコックの観察には現在でもよく書かれる「日本人論」のような箇所が見受けられる。
- 19) 幕末から明治初期に來日した西洋人は漢字と日本語の因果関係に関心を持ち、ローマ字のみでの学習(話し言葉に力点をおいた宣教師の一部を別にして)には飽き足らず、日本文字、漢字、平仮名、片仮名とそれぞれの草、行、楷、異体を勉強している。さらに<音、訓>の問題もあり、変体仮名などの字体の種類も多かった当時の学習の困難さは想像にあまりある。音訓に関してはオールコックはこれを<読みのモード>と呼んでその学習に多くのエネルギーを注いだ。
- 20) この理論編(文法)は12章に分かれており、第一章の序論では日本語と他言語との違い、古代日本語と現代日本語の違い、日本語に与えた漢語の影響、書記法などが詳しく述べられている。第二章以下は次の通りである。二章、発音と文字の変化、三章、名詞、四章、代名詞、五章、後置詞(助詞)、七章、形容詞、八章、動詞、九章、動詞(結び)十章、副詞、感投詞、接続詞、特殊語法、十一章、敬語、十二章、構文法(統語論)と整理されており、豊富な文例を使いながら詳細に書かれている。(チェンパレン『日本語口語入門』第二版翻訳より)
- 21) マイケル・ロウエ、2000年1月9日にケンブリッジ大学でインタビュー、「駆逐艦は沈没せられたり」と言う一言は、今も鮮やかに覚えているとの話であった。彼は6ヶ月の訓練の後、軍隊行きかわりにブレッチェリー・パークで、暗号解読に携わる。日本の暗号はそれほど難しくなかったが、昭和天皇の終戦の宣言は理解できず残念だったと話してくれた。
- 22) この章全体のもととなった資料はF.J.Daniels, War-Time course, Sep.1945と大庭定男著「戦中ロンドン日本語学校」である。又、インタビューならびにアンケートにこたえてくださった方々のお話から構成したものもある。
- 23) 言語教育はその時期によってさまざまな様相を示す。現代の語学教育は、海外における日本語教育を見れば、経済の動きと密接に関連していることが分かる。
- 24) なぜここで「作り出した」という表現を使ったかと言うと、学習者のほとんどが、日本語を学びたくて入学したのではないからである。後で見て行くよう

に、いわば偶然に学習をはじめることになったケースが多かった。

- 25) 1944年のSOASのDepartmental Reportに Lecturesとして資料があった。内容は「日本の占領下の中国」「二つの対戦艦の日本の国際関係」「仏領インドシナの文化的背景」「朝鮮、満州についての講演」「日本の人口問題」「日本軍の中国における経済状態」「日本の宗教」「現代日本」「言語の脅威-敬語法」「英国と中極」「マラヤ」「1868年以降の日本の経済史」、1945年には上記の他に「日本の政治」「財閥」などの講演も行われ、占領後のことも含めて考えられていたことがうかがえる。
- 26) ロナルド・ドーア1999年0月15日に電話でインタビュー
- 27) サー・ピーター・パーカー質問表を送り、返答あり。自伝の中に当時のことを書いた部分がある。
- 28) パトリック・オニール1980年代にも使われていた教科書を作っている「敬語」についての教科書がある。日本語のAのテストに出題される文章を梁田銓次と共著の「日本文読み方」として出している。
- 29) サー・ヒュー・コータッツイ1999年10月17日、京都ホテルフジタでインタビュー
- 30) ダグラス・ミルズ質問表を送り、返答あり。数ある日本人論に対して、懸念を表している。
- 31) リュー・ラドボーン質問表を送り、その返答あり。
- 32) テリー・タウンゼント1999年8月9日に東京、新宿のホテルでインタビュー、授業風景などを話してくれた。
- 33) 大庭定男著『戦中ロンドン日本語学校』に教官、学生のことが詳しく述べられているので、本校では結論に導くための主要な人物のみを拾い上げた。
- 34) C.ブラッカー「サー・フランシス・テイラー・ピゴット、F.S.G.ピゴット陸軍少将」pp.205-206より引用『英国と日本架橋の人々』サー・ヒュー・コータッツイ&ゴードン・ダニエルズ編大山瑞代訳、思文閣出版1998
- ・著者のカーメン・ブラッカーは同級生がピゴット少将の娘ジュリエットであったことから、1941年の秋より週2回の日本語の個人教授を彼から受けた。その後、彼女はSOASで日本語を教えることとなる。
- 「・F.S.G.ピゴットは17歳で陸軍工兵になり、東京で二度、中日英国大使官付き陸軍武官として勤務した。日英同盟が生んだ最も親日的英国人といわれてきた彼が目指した人生最大の目標は、友好的な日英関係と両国の相互理解と善

意を促進させることであった。・・・父親と共に四歳の時に来日し、明治中期の東京で過ごした3年間は、彼の思い出の中で、どこか牧歌的な楽しさを漂わせていた。当時日本にきた外国人を魅了していたのは、日本の良い面であり、彼らはそこに無邪気で汚れなき楽園の幻想を見ていたのであるが、これは同時に、日本が自ら作ったものではなく、西洋から導入された暗い悪魔的な機械の力によって壊される危険を含んでいた。ピゴットの心をその後の生涯を通じて鼓舞し続けたのは、その日本の良い面であった。日本人を先ず「理解すること」である。そうすれば、忠誠心、高い信頼性、純真さ、礼儀正しさ、剛胆さなどと言う日本人の伝統的美徳が、やがては、日英両国間の温かい友情となって花開き、正しい親善関係を一層豊かなものにするだろう、と彼は信じたのだ。この「理解」のための鍵、必要な手がかりを見つけることは、忍耐と努力を擁するが、そう難しい事ではない。彼自身はこの鍵を見つけたと確信し、他の人にもいかにして鍵を見つけ、いかにして鍵をあけるかを示していくことこそ彼の義務であると信じた。」

35) (『日英の間で』ヒュー・コータツツイ回顧録P.23より引用) 1952年1月の全クラブ合同の講演会であった。それは英国東方艦隊の主力艦プリンス・オブ・ウエールズとレパルスが日本軍に撃沈されたあとで、シンガポールが日本軍の手に落ちる前であった。講演者は80歳を超えるお年でありながら、まだかくしゃくとして動物学教授を務めておられた高名なウエントワース・トンプスン教授であった。トンプスン教授は世界的に著名な生物学者で英国学士会会員であるとともに傑出した数学者で、古典学者でもあった。・・・この講演においては、19世紀末に日本を訪問されたときのことを、特に日本庭園についての印象を話された。戦争中の当時、先生が敵国として戦っている相手の日本の洗練された文化をあのよう上品に紹介されたのは相当勇気のいることだった。教授はとても感動的にとらと話をされたが、日本はその帝国陸海軍の行動をとにかくとして、我々英国も學ぶ価値を持っており、このことは戦争の間も忘れてはならないと言うことを、我々学生に理解させようとしたのだろう。

36) 週毎の目標も詳しく決められていた。G (ジェネラルコース) 3から、G20に分けられており、この第2期中に基本単語や決められた漢字を全てマスター出来るように配分されていた。詳細は以下の通りである。

G3 (8週から12週) 数の練習、基本単語

G4 (13週から16週) 動詞の練習、基本単語

- G5 (17週から20週) 前の2段階の練習に受身の形も入れて練習、基本単語
- G6 (21週) 「がる」という語尾をつけることによって動詞になる形容詞、基本動詞
- G7 (21週) 話し言葉の構文
- G8 (22週から24週) 『敵前渡河』の口語体テキスト(ローマ字)
- G9 (22週から) 『敵前渡河』などの英訳を学ぶ
- G10 (25週から27週) 『鯨狩りの話』口語体のテキスト(ローマ字)
- G11 (28週から30週) 『北の生命線』口語体のテキスト(ローマ字)
- G12 (31週から40週) 『二人の小説家の会話(別名宣撫班)』(ローマ字)
- G13 (31週から40週) 同じテキスト(英語)を日本語とつきあわせて練習
- G14 (8週から13週) 書き方の導入。単語は基本単語、字は基本文字だけを使用2名に一冊、上田万年の『日本国語大辞典』が渡される。その他、ローズ・イネス著『和漢字および漢字熟語の初心者用辞典』(Rose-Innes: Beginner's dictionary of Chinese-Japanese Characters and Compounds), 「基本単語表」, 8週から35週までに毎週新規に出てきた「単語のリスト」, 「基本漢字表」, ローズ・イネス著『日用日本語単語集』(Rose-Innes: Vocabulary of Common Japanese Words), アイゼモンガー著『日本語の書き方』(Isemonger: Japanese writing)
- G15 (8週から13週) 書き方入門、補習、同上
- G16 (14週から18週) 書き方入門(第2部) 同上
- G17 (14週から18週) 同上、補習、
- G18 (19週から23週) 同上、(第3部)
- G19 (24週から30週) 同上、(第4部)
- G20 (31週から35週) 『敵前渡河』、口語体テキストを以前ローマ字、英語で読んでいたものをここからは原文で読む練習。
研究社『新英和大辞典』(岡倉由三郎編、第60刷)、研究社『新和英大辞典』(武信由太郎編、第85刷)、三省堂『英和辞典』が渡された。
- 37)
- G21 (36週から40週) ナリ・スタイルの例文をローマ字で練習
海軍派遣者のみに与えられた辞書として、二冊揃いの海軍中佐尾崎主税編『英和海語新辞典』(三省堂昭和10年)があるが、グループ内に海軍派遣者がいない場合には、グループ全体で一揃い与えられた。また、陸軍派遣者に与えられたクレスウエル・平川・難波共著『陸軍用語辞典』(Lt. Colonel H.T.

Creswell/Maj.J. Hirakawa/Maj. R. Namba: A Dictionary of Military Terms English-Japanese / Japanese-English, 1942),そして、空軍出身者には空軍用語集が与えられた。チェンバレン著『簡約日本語文法改訂版』(B.H.Chamberlain: A Simplified Grammar of the Japanese language-Revised edition by Colonel James Garfield McIlroy, University of Chicago Press, 3rd impression, 1942)がテキストとして使用された。

G22 (36週から40週) ナリ・スタイルの例文をローマ字で練習

G23 (36週から40週) 同上、原文で練習

38)

G24 (41週から44週)『鯨狩りの話』、以前に勉強した口語体のテキストを原文で練習。基本漢字。海軍用語基本リストが海軍派遣者に、陸軍基本リストが陸軍派遣者に与えられた。この週より、チェンバレン著の『文字の知る辺』も固有名詞の練習として使われている。

G25 (41週から60週) コース出身者で助教のダグラス・ミルズによる「ナリ・スタイル」の練習

G26 (45週から48週)『北の生命線』口語体のテキストを原文で練習。基本漢字。

G27 (45週から) 新聞ニュースに出てくる漢字の練習

G28 (45週から) 海軍読本。漢字の練習と、海軍から派遣された学生に海軍用語を教えるため行われた。

G29 (45週から)『東部印度航空兵要地誌概要』漢字を覚えるためのテキストとして使用

G30 (49週から54週) 以前G12で使った口語体のテキスト『宣撫班』の漢字を覚えるために原文を使用。基本漢字

G31 (55週から62週)『マレー攻略』をテキストに使い漢字を覚える

G32 (60週から) 実際に日本軍より鹵獲した公文書を使用。翻訳の練習。

60週以降または、もっと以前の段階で二冊の辞書が与えられた。ピゴット少将著『草書の基本』(Major General F.S.G Piggott: The Elements of Soshu, Kelly & Walsh, Yokohama & HMSO, 英国政府印刷局、1943)とおとめ・ダニエルズ著『日本語書き方(草書)辞典』(Otome Daniels* Dictionary of Japanese [Soshu] Writing Forms, Percy Lund Humphries & Co. Ltd. 1944)

G33 (62週より)『珊瑚海海戦』で漢字の練習

G34 (41週より44週)『燃ゆる大空』(戦争中に作られた映画)の台本や主題歌を口

ーマ字化したものをテキストに使用。

G35 (45週から49週) 『マレー攻略』をG31の漢字を習う前の段階でローマ字版を使用していたもの

G36 (50週から) 『珊瑚海海戦』をG33の漢字を習う前の段階でローマ字版を使用していたもの。

参考文献・論文

アンダーソン、B 白石さや・白石隆訳 『増補想像の共同体』 NTT出版、1997

大庭定男 『戦中ロンドン日本語学校』 中公新書1988

キーン、S, 佐藤卓巳、八寿子訳 『敵の顔』 パルマケイア叢書柏書房1994

北川勝彦、平田雅博編 『帝国意識の解剖学』 世界思想社1999

木村宗男編 『日本語教育史』 明治書院1991

クルマス、F山下公子訳 『言語と国家』 岩波書店1985

木畑洋一、小菅信子、フィリップ・トウル編 『戦争の記憶と捕虜問題』
東京大学出版2003

『20世紀の戦争とは何であったか』 大月書店2004

コータツツイ、H 『英国と日本架橋の人びと』 思文閣出版 1998

『日英の間で』 日本経済新聞社1998

コンティヘルム、E 『イギリスと日本』 サイマル出版1989

近藤和彦 『文明の表象英国』 山川出版1998

サイード、E 『オリエンタリズム』 平凡社1986

『文化と帝国主義 1』 大橋洋一訳みすず書房1998

『文化と帝国主義 2』 大橋洋一訳みすず書房2001

『知識人とは何か』 大橋洋一訳平凡社ライブラリー 1998

酒井直樹 『死産される日本語、日本人』 新曜社1996

『総力戦下の知と制度』 -岩波講座『近代日本の文化史 7』 2002

杉本つとむ 『西洋人の日本語発見』 創拓社1989

『西洋人の日本語研究』 八坂書房1999

杉本淑彦 『文明の帝国ジュール・ヴェルヌとフランス帝国主義文化』

山川出版1995

スピヴァック、G・C 『サヴァルタンは語るができるか』

上村忠男訳みすずライブラリー1998

チェンバレン、B・H 『日本語口語入門』 大久保恵子編・訳笠間書房1998

ダワー、J 『人種偏見』 TBSブリタニカ1996

東田雅博 『大英帝国のアジア・イメージ』 ミネルヴァ書房1996

『図像のなかの中国と日本』 山川出版1998

西川長夫 『増補国境の越え方』 筑摩書房1992

『戦争の世紀を越えて』 平凡社2002

細谷千博（編）『日英交流史 3 軍事』 東京大学出版会2001

『日英交流史 5 社会・文化』 東京大学出版会2001

ホブスボーム、E・J 『創られた伝統』 紀伊国屋書店1992

『ナショナリズムの歴史と現在』 大月書店2004

本橋哲也 『ポストコロニアリズム』 岩波書店2005

山口幸二 「分裂する「言語観」 膨張する「日本語」とその「教授法」をめぐつて」 『ことばとそのひろがり（2）』 立命館法学2004

山下暁美 「戦時下における敵性後教育 日・米軍の言語教育をめぐつて」

『常磐大学人間科学』 13号1996

「アメリカの日本語教育 2 つの小史覚書」

『講座日本語教育』 早稲田大学日本語研究学習センター1994

英文文献、資料

Adamthwaite, A 'British view of Japan, 1941~1945'

Blacker, Carmen "The Catalpa Bow" Japan Library, London 1999

Cortazzi, Sir Hugh "Modern Japan" St. martin's press, Inc. New York 1993

Daniels, F.J. 'Japanese Studies in the University of London and Elsewhere'

The Japan Society of London, bulletin 41, 1963

'Japanese Studies In England and Japan

The Japan Society of London, bulletin 3, 1951

Dore, Ronal 'Otome and Frank Daniels' "Britain & Japan - Biographical Portraits"

Japan society 1994

Hook, G.D. 'Japan and the war: bombs, babies and Brits' "Japan Forum vol.9

No.1

Routledge, London, 1997

Jelinek, M, 'Old and New Issues Affecting Japanese Language Teaching at U.K.

Universities' A report of 1994 Nanzan Symposium

Oba, Sadao "The Japanese War" Japan Library 1995

"School of Oriental Studies, London Institutions - Report of the Governing Body and Statement of Activities of the Year 1937-1949"

インタビュー、質問票などに応じて下さった方々

大庭定男『戦中ロンドン日本語学校』の著者、様々な資料のご提供とご協力、紹介の労をとって下さったことなど、感謝したい。

Dr. Blacker, Carmen『あづさ弓』の著者、民俗学者、日本のシャーマニズムの研究者

Mr. Charles, Stanley前英大蔵省、大英帝国三等勲爵士

Sir Cortazzi,, Hugh元駐日大使、ジャパンフェスティバルなど日英文化交流に力を注いでいる。

Dr. Dore, Ronaldロンドン大学経済政治学院教授、日本研究専攻

Dr. Loewe, Micaelケンブリッジ大学教授中国研究専攻

Dr. Mills, Douglas E 元ケンブリッジ大学教授、中世日本文学専攻

Sir Parker, Peter KBE LVO英国前国鉄総裁、日英間の産業界の交流に力を尽くす

Mr. Townsend, Terry A.日本在住、航空機関係の日英間の交渉の通訳や翻訳に携わる

Mr. Radbourne, lew A. OBE 日英の歴史著作に関わる。